

平成29年 環境生活委員会 開催状況 (環境生活部)

開催年月日 平成29年10月5日
 質問者 民進党・道民連合 広田まゆみ 委員
 答弁者 環境生活部長 小玉 俊宏
 文化・スポーツ局長 甲谷 恵
 文化振興課長 高見 芳彦

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>一 百年記念施設の継承と活用について</p> <p>前日委員会の時に提案されました、「百年記念施設の継承と活用」について、私、現地の方も見させていただきましたので、それに基づきまして、ご質問をさせていただきますと思います。</p> <p>(一)150年事業の際に過去の50年、100年事業から学ぶべき点について</p> <p>道では、いわゆる百年記念施設周辺地域を、北海道命名150年を契機とし、北海道の宝物を体感し、インバウンドのお客様を含めての交流の場ととらえ、今後50年、100年先をも展望しながら、次の世代にどのように引き継いでいくのか、再生に向けた議論の方向性を示す考え方の案をとりまとめていただいたと承知をしています。</p> <p>まず、この議論のはじめに確認をしたいのは、開道、当時開道という名前でやっていたと承知をしていますが、開道50年事業の概要とその遺産、また、合わせて100年事業の概要と当時どのような100年事業にあたって議論があったのか伺います。</p> <p>例えば、開道50年の時には、今、たぶん残っていたら、すばらしく価値が出るような、野外音楽堂ですとか、いろんな建造物があったのですが、跡形もなく、今は無くなっているということも調べまして、そんなこともわかってまいりました。</p> <p>私としてはですね、50年、100年事業のある意味、前向きな反省も踏まえれば、建造物云々ということではなくて、どんな仕組を残していくか、50年100年先に、子供たちや若い人たちが北海道の歴史ですとか、そういった北海道の財産をどういうふうな次の世代に残していくのか、そういう仕組みを、どう残せるかということが大事なのではないかなということを50年、100年事業の議論経過から、私としては重要だと認識をしているところです。</p> <p>(二)各百年記念施設のあり方の方向性について</p> <p>次に、各百年記念施設のあり方の方向性について、1つずつ伺ってまいります。</p> <p>1 北海道博物館について</p> <p>北海道博物館については、新しくリニューアルされて以降、ジオパーク展やプレイボール展など、いわゆる物の収蔵展示にとどまることなく、全道のさまざまな類似施設とかも含めて広義の博物館などとも連携しながら、現場の学芸員たちの創意工夫ある展示などの努力に敬意を表しているところであります。道は、北海道全体をミュージアムに見立てて、地域の歴史やさまざまな文化を発掘・再発見し、それを発信・継承していく「北海道ミュージアム構想」の中核的博物館としての機能強化に努めるということも、先日提案された検討案にも示されておりましてけれども、私としては、北海道博物館が地域の相互支援のネットワークづくりに更に機能していくために、道庁全体としてもこれは重要な課題だと認識をしています。</p>	<p>(文化振興課長)</p> <p>50年事業、100年事業の概要等についてであります。道では、これまで50年などの節目ごとに記念事業を行ってきておりますが、先ず、1918年、大正7年の50年記念事業においては、記念祭や拓殖功労者表彰式、北海道史の編集のほか、記念博覧会を開催したところです。この博覧会は、札幌市の中島公園や札幌停車場通、小樽市の3会場において、テーマ館や水族館などを設置し、50日間で140万人が訪れるなど、盛大に開催されたところでございます。</p> <p>残念ながら、当時の建物等は現存しておりませんが、札幌の馬車鉄道の一部がこの年に電化され、現在の市電の前身となっているところです。</p> <p>次に、昭和43年の100年記念事業についてですが、記念祝典や北海道大博覧会の開催、新北海道史の編集などのほか、野幌森林公園の造成、開拓記念館や百年記念塔の建設、その他、各振興局管内に1施設ずつ全道14カ所において地方記念施設を設置するなど、様々な取組を行っているところです。</p> <p>100年記念事業については、道議会において、100年という記念すべきときに相応しいといった内容のご意見のほか、財政面や他の施策分野にも配慮すべきなどのご意見もあったものと承知しています。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>(1)「アートギャラリー北海道」との連携について そこで、まず、伺いますが、現在、教育庁で議論されている「アートギャラリー北海道」とはどのように連携していく考えか伺います。</p> <p>後で触れますけれども、全道には、様々な野外彫刻なども数千存在しておりまして、そうしたところの、今、維持補修などをされている団体とも十分連携をとっていただければと考えているところです。</p> <p>(2)道内の私設博物館との連携について 道内には、貴重な歴史資料になるような、そういうものを収蔵展示している公設、私設博物館がたくさんあります。私自身、昨年10月、11月の間に、限られた期間でありますけれども、道内の私設博物館などを中心に約70か所「館」めぐりをいたしました。中には、残念ながら閉館するところもあり、北海道の歴史にとって貴重な資料や、収蔵品の散逸なども危惧されるところです。本道における中核的博物館として機能すべき北海道博物館は、どのようにこうした私設博物館と連携しているのか伺います。</p> <p>(3)北大博物館や赤れんがサテライトなど、都心部から誘導する仕組について 北海道博物館には、新さっぽろからバスを活用するのが公共交通では一般的だと思います。私自身またまバスの中で出会った外国人観光客の方は、大変、日本語堪能な方でありましたけれども、そのお話によりまして、北大博物館や赤れんがサテライトをぐるっと回ってきて、博物館にいらしたということで、都心部からのインフォメーションがもっとあるべきであり、もっと宣伝されている、価値のある展示だとのお話でありました。プレイボール展においては、札幌市内のホテルなどとの連携などが取り組まれたことは評価していますが、ある意味で、後で「ものさしの確立」という部分をお話しますが、入込数というのが評価指標とならざるを得ない今日の中、かなり条件は不利ではあるというふうにご覧いただいております。そういった中で、都心部から百年記念施設へ誘導するために、どのような取り組みを実施しているのか、また、今後どのように進める考えか伺います。</p>	<p>(文化振興課長) 北海道ミュージアム構想についてであります。道では、北海道博物館を核として、本道固有の歴史や道内各地の様々な文化を発掘・再発見し、発信・継承するため、「北海道ミュージアム構想」を推進しており、これまで道内の博物館や美術館と連携しながら、「夷酋列像」展を実施したほか、赤れんが庁舎にある北海道博物館のサテライトや歴史文化ポータルサイトの活用により、一元的な情報発信などの取組を行っているところです。教育庁が道立美術館を核として進めようとしている「アートギャラリー北海道」は、道内の美術館や文化施設等が相互に連携し、多様な鑑賞機会の提供や魅力あるイベントの実施などにより、北海道全体をアートの舞台として、美術館を訪れる人を増やし、地域に、賑わいをもたらす取組と承知しております。今後とも、こうした取組とも連携しながら、道内の博物館や美術館の魅力の向上や道内各地の多彩な文化の振興に努めてまいります。</p> <p>(文化振興課長) 私設博物館との連携についてであります。北海道博物館では、私設のものを含む、道内博物館の連携を図り、各施設の振興発展に寄与するため、博物館、美術館、水族館等で構成する「北海道博物館協会」の事務局を担っており、全道大会の開催や機関誌の発行を通じて、会員相互の情報交換や資料の貸出等の連携を図っているところです。また、新札幌から江別市にかけてのエリアには、民間が設置したものを含む博物館や水族館、図書館などによる連絡協議会があり、北海道博物館がその事務局を担い、各施設を回るスタンプラリーや協働のイベントを実施しているところです。このほか、北海道博物館では、私設博物館の貴重な資料の散逸を防ぐため、平成10年には、当時の北海道拓殖銀行本店史料室の閉館により、美術資料など約4,000点の寄贈を受けたほか、このたび、平成27年に閉館した「弥永北海道博物館」から、貨幣や考古学資料など貴重なコレクションの一部の寄贈を受け、今月20日から1カ月間にわたり企画展を開催するところです。今後とも、私設博物館を含む道内の博物館等との連携を深め、貴重な資料の散逸防止をはじめ、地域における知の拠点である博物館の振興に努めてまいります。</p> <p>(文化振興課長) 都心部から誘導する仕組についてであります。道では、平成27年度から、野幌森林公園にある北海道博物館への誘客につながるよう、訪日外国人をはじめ、多くの方々で賑わう道庁赤れんが庁舎にサテライトを設置し、収蔵品を一部展示するほか、北海道博物館のイベントやアクセス情報を多言語で発信しているところでございます。また、北大総合博物館とは、「北海道博物館協会」を通じた連携のほか、札幌周辺地域の博物館、図書館、動物園、水族館などがネットワークをつくり、地域住民を対象に、ひとつの科学テーマを学ぶスタンプラリーの取組や、協働でのフェスティバルの開催等を実施するほか、市内の文化施設等との共通チケットを販売するなど、各施設の誘客促進に努めてきたところです。このほか、札幌駅前にある民間のホテルには、北海道博物館の特別展のPRのため、パネル展示やレストランでの限定メニューの提供等でご協力いただき、宿泊客や駅前に集う方々への周知にも努めているところです。今後とも、これらのネットワークや連携の取組を通じ、都心部からの誘客促進に一層努めてまいります。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>(4)入込数以外の評価のものさしの確立について 北海道博物館にリニューアルして、これまで開拓記念館当時はなかった第三者評価の仕組が、北海道博物館になって導入されたことは承知しております。昨今では、とかく入込数だけで評価される風潮がありまして、もちろんこれも重要な指標の一つではありますが、入込数だけが評価のものさしになると、学芸員さんが現場で創造性を発揮したり、いろいろな挑戦ができないことも危惧されるところであります。入込数以外の評価、ものさしの確立について伺います。</p> <p>2 北海道の開拓の村について (1)開設当時のコンセプトなどについて 次に、北海道開拓の村についてまた何点か伺っていきたいと思いますけれども、まず、開設当時のコンセプトなどについて伺います。 先日、北海道開拓の村を改めて伺いました。何度か通過するようにお邪魔したことはあったのですが、学芸員さんの説明なども含めまして、短時間ではありますが、お邪魔させていただきました。改めて、私自信が「館」めぐりをしたり、150年と言うところで、歴史文化を振り返ると言うところで、視点が変わったというところもあるのですが、改めて、今、世界遺産申請中の縄文遺産、狩猟生活をしながら、1万年近くの間、争いのない定住生活をされてきたと言われる縄文遺産と、また、今、アイヌ文化の復興等のナショナルセンターとして、開設予定の「民族共生象徴空間」の2つに劣らない、北海道にとっての歴史的価値を改めて感じて帰ってきたところです。 その間、北海道は、150年の短い間に国内のいわゆる移民政策によって短期間に近代化を遂げましたが、これは、先進国の中でも、中々、例を見ない歴史だと聞いております。ただ、その近代化の過程で、建築物などに敬意を払うことなく、近代化を急ぎ、古いものをどんどん壊し、新しいものを造ってきた言う歴史があると思います。 その開拓の村ですけれども、昭和58年の「開拓の村」建設当時は、当時の全道212市町村すべてに調査員が配置をされていて、それらの地域の調査員の方の情報に基づき、52棟の建築物が移設復元されたと聞いています。 テレビドラマ「マッサン」の撮影で使用されたことによって注目されている「番屋」の建築物は、移設費用だけで、2億4千万円ほど、当時のお金で要したと聞き、驚きますが、大変素晴らしいのは、建物だけではなく、生活用品や家具調度など当時の暮らしそのものが全て再現するようにデザインされ展示されています。 また、多くのボランティアの方たちの活動に支えられているのも大変印象的でありました。 北海道開拓の村を開設した当時の目的、コンセプトはどのようなものであったのか、改めて伺います。</p> <p>(2)開拓の村の名称変更に係る議論について 次に、開拓の村の名称変更に関わる議論について伺いたいと思いますけれども、ご存じのとおり、北海道博物館は、開拓記念館から、北海道博物館へとリニューアルしましたが、「開拓の村」は当時の目的、コンセプトからかもしれませんけれども、「開拓の村」はそのまま名称が残っております。「開拓」という言葉から感じる私にとつてのイメージは、ある意味、「開墾」という、「耕す」と言うか、非常に限定的なものに感じられまして、今回、「開拓の村」をお邪魔をいたしまして、重要な建築物が実際残っているということも含めて、「開拓」と言う言葉だけでは表現できない価値があると思います。 開拓の村に集められた建築物は、本来であれば、全道各地から集まっていたから、その場所で時を重ね、地域の子どもたちにも当時の歴史・文化を身近に感じられるそういうものであったはずですが、本来は、そうあるべきだったので、残念ながら、先ほど申し上げましたように、150年の近代化、急速な近代化を急ぐ中で、あの空間に集められなかったら存在できなかったものであります。 これまでの開拓の村の名称変更などに関わる議論について、どのようなものだったのか伺います。</p>	<p>(文化振興課長) 入込数以外の評価などについてであります。道では、博物館や開拓の村などにおける事業を円滑かつ適正に行うため、民間有識者等を構成員とした「北海道立総合博物館協議会」を設置して、運営や事業効果について、評価やご意見をいただいているところです。 また、毎年度、博物館などの各施設を訪れた利用者の方々に対して、施設全体の満足度や改善点などを回答いただく「利用者満足度調査」を行っており、こうしたご意見などを踏まえ、入場者の増加にとどまらず、各施設における学術や教育面でのレベルや魅力向上に努めているところでございます。</p> <p>(文化振興課長) 北海道開拓の村の開設の目的であります。昭和58年に開村した開拓の村は、北海道百年記念事業の一環として設置が決定され、昭和49年に基本計画が策定されているところでございます。 その設置目的といたしましては、「北海道開拓の過程の中で、明治、大正時代を中心に、生活と産業、経済、文化の歴史を示す建造物を移設、復元、再現して保存するとともに、当時の情景や生活用品のほか、各種資料を再現展示して、開拓の歴史を体験的に学び、野幌森林公園の恵まれた自然に親しみながら、開拓の歴史が楽しく学べ、未来の発展の心を養う場とする」とされているところでございます。</p> <p>(文化振興課長) 開拓の村の名称についてであります。開拓の村の名称は、昭和48年に策定した「建設基本構想」の中で明示されたものであり、その名称は、旧開拓使札幌本庁舎をはじめとする主に明治から大正の開拓期における建造物を展示するとともに、当時の生活体験や年中行事を再現するなど、本道における開拓の歴史を身近に学ぶ野外博物館として相応しいとされたものでございます。 平成27年に旧北海道開拓記念館が、北海道博物館としてリニューアルされた際にも、開拓の村に関しては、その目的等は、設置当初と変わっていないことから、名称の議論はなされなかったものと承知しているところであります。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>(3) 今後の検討に向けて</p> <p>私としては、世界縄文遺産、そして、民族象徴空間と併せて、北海道の近代化の歴史と言うことで、十分な再評価がされるべきだと思っております。</p> <p>そこで、今後の検討に向けてと言うことなんでしょうけれども、私自信、繰り返しになりますけれども、先日も開拓の村にお邪魔し、実質上、一律な、財政コストのカット、財政的な制約の中で、十分な維持補修などが、この間行われてこなかったこと、また、学芸員やボランティアの皆さんなど、現場の努力が正当に評価されているとは言えないことに、私自身、道議会議員の1人として、責任の一端を感じて帰ってきたところであります。</p> <p>文化施設においても一律的に行われている現在の指定管理者制度のあり方ですとか、建築基準法の文化施設への適用のあり方の検証ですとか、また、インバウンド時代における文化施設の利用料条例の見直しのあり方、今は、シニア世代であれば外国の方でも無料で入れると伺いましたので、そういうあり方など、北海道民の歴史財産を守り、活用するために検討すべきポイントが、かなり多くあると考えます。</p> <p>私としては、宿泊施設としての利用も含め、建造物の補修費用に広く外部資金などを導入することなども含めて検討すべきと考えますが、見解を伺います。</p>	<p>(文化・スポーツ局長)</p> <p>今後の開拓の村のあり方についてでございますが、道では、百年記念施設が抱える課題や今後の取組などについて検討を行うため、昨年9月に有識者による懇談会を設置し、これまで現地視察を含め4回開催したところでございます。</p> <p>その中で、開拓の村のあり方に関する主な意見としては、「近年増加している訪日外国人を惹き付ける体験型イベントを実施すべき」と言ったものや、「施設の修繕等に外部資金や民間活力などを導入する方策」などについてご提案がありました。</p> <p>道では、本年9月に、これらの意見を踏まえまして、今後の議論の方向性を示す「百年記念施設の継承と活用に関する考え方」の案を取りまとめておりまして、その中で、今後、外部資金の導入や訪日外国人の受入対策の強化など、幅広く道民の意見を伺いながら、検討することとしております。</p> <p>開拓の村が道民の貴重な財産として、国内外から訪れる多くの方々に賑わう施設となりますよう、様々な方策について、今後、具体的な検討を進めてまいると考えております。</p>
<p>3 北海道百年記念塔について</p> <p>次に、北海道百年記念塔についてでございます。ここについても、先日、現場を拝見してまいりました。展望台としての百年記念塔は、立入禁止措置がとられておりまして、特別に入れていただいた訳ですけれども、その周辺一帯のデザインも含め、私の想像する以上に多くの地域の方が散策する場として親しまれていました。</p> <p>建設当時の知見により、風雨にさらされるほど強度を増すコールテン鋼という素材を使ったということですが、確かに錆などの劣化が進んでいました。エレベーターもかなり老朽化しているため、展望台としての活用の価値は費用対効果などの観点で私としては困難と考えました。道は、道の検討案にも触れられているようにモニュメントあるいはランドマークとしての価値は、単純にコスト論だけでは判断できないものがあると考えます。</p> <p>今回は、道が取りまとめた考え方の案では、この塔の根元に設置されている佐藤忠良氏、北海道でも縁のある彫刻家の佐藤忠良氏のレリーフの活用も選択肢として取り上げられていますが、この塔の再生、もしかすると代替と言うようなことも議論として、このレリーフの活用が取り上げられているのは違和感というかひっかかりを感じました。</p> <p>全道には、札幌彫刻友の会さんと言うものがありますけれども、その札幌彫刻友の会、野外彫刻の維持補修とか清掃の活動をしているその友の会さんの調査によりますと、佐藤忠良氏の作品は、全道で59点ほどあり、その中には、開拓記念に関わるものも含まれています。また、北海道博物館の前にもありますけれども、北海道出身の山内壮夫や本郷新などの野外彫刻が、今、数千体ほど、道内に存在していると伺っております。</p> <p>その札幌彫刻友の会さんのデータベースによりますと、その中で「開拓」の歴史を表す野外彫刻が、札幌市内だけでも97点、その他全道では473点ほどであると伺っております。</p> <p>これらの数千の野外彫刻の中には、ちょうど同じように、皆さん、建てたときは、いろんな団体の方やいろんな方が、記念として建てられるのですが、設置から年数が経過して、維持管理が困難になっているものが多数ありまして、札幌彫刻友の会の皆さんなどが、自ら調査し、作成した野外彫刻のデータベースをもとに、鉄やブロンズ、コンクリートなど素材に応じた清掃活動や維持補修にあたられていると言う現状にあります。</p> <p>有名作家であるか否かに関わらず、そうした野外彫刻のそれぞれの価値を誰がどのように評価し、そして、維持補修を誰がどのように担当し、何でもかんでも残したら良いと私は思っておりませんが、その費用は誰がどのように負担するのかなど、そのことが、文化、歴史を守って行く上で、大きな課題となっております。</p>	<p>(文化・スポーツ局長)</p> <p>今後の百年記念塔のあり方についてでございますが、本年9月に取りまとめた「百年記念施設の継承と活用に関する考え方」の案では、百年記念塔については、近年、老朽化が進み、安全確保のため、平成26年7月より立入禁止になっており、今後も維持していくためには、多額の費用負担が見込まれる状況となっていることから、安全性や将来負担、さらに周辺地域との関連など様々な観点から引き続き検討するとしていただいております。</p> <p>今後の検討に当たりましては、将来にわたる維持管理経費などについても把握が必要になることから、現在、専門の業者に調査を委託しているところでございます。</p> <p>調査に際しましては、展望塔としてではなく、モニュメントとして維持する場合も想定しておりますが、点検、補修作業や機材の運搬等、安全対策に必要な施設や設備の保全と維持に、相当の費用を要するものと考えており、そうした状況も踏まえまして、幅広く道民の意見を伺いながら検討を進めてまいることとしております。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>もちろん、こうしたある程度の大きさの野外彫刻の話と、百年記念塔は単純に比較するものではありませんけれども、もし、新たな形で、塔の丁度根元、入口のところに、佐藤忠良氏のレリーフがあるのですけれどもそれを新たなモニュメントとして残すというような議論を含めて、150年を契機に、百年記念塔がコスト論だけで姿を消すのは、非常に耐えがたいものであります。</p> <p>例えば、展望塔としてではなく、モニュメントとして維持補修する場合も含めて、費用見積もりの再検討が必要かと考えます。その際は、もちろん、安全性を考慮しなければいけません、鉄が錆びていく状況そのまま見守り、受け止めるような従来の建築物にはない感覚での再検討が必要かと考えますが、検討の視点、状況について伺います。</p> <p>(三) 検討のあり方について</p> <p>今後の百年記念施設の検討のあり方についてですけれども、私としては、大人達だけ、大人の理屈だけで決まらずに、単なるコスト論だけで片づけられない、未来に残る教訓というか、一つの事例として、子どもたちや、百年記念施設近郊の特徴として、大学が非常に多いと承知をしておりますので、近郊の大学生など若い世代が参画する形で検討が行われるべきだと考えます。</p> <p>とりわけ、地域の子どものたちにとっては、何気ない風景として見ていたものが、ある日、突然姿を消す訳です。古いものはなくなるのだ、文化よりも経済性が優先されるのだ、それが、150年記念の潜在的な記憶になってしまうことの方が、私は維持補修のコストよりも、北海道の50年・100年先の未来にとって大きな損失だと考えます。</p> <p>アリのバネ的な子ども参加とか若者参加ではなく、一定の回数を重ね、歴史文化の価値を、地域でいろんな活動を実践しているNPO団体の方たちもいますので、そうした方たちから、しっかりと学ぶような場ですとか、あるいは、単純に何でも残せばいい、それは役所がやればいいのかという事ではなくて、維持補修コスト負担のあり方などについても十分情報共有した上でワークショップなどを開催するなど、地域の住民の皆さん、特に子どもたち、若い世代など、可能な限り次の世代が関わる形での検討をしていただければと思います。</p> <p>今後どのように取り組む考えか伺います。</p>	<p>(環境生活部長)</p> <p>百年記念施設に関し、今後の議論のあり方についてでございますが、道では、有識者で構成する懇談会でのご意見も踏まえ、このたび「百年記念施設の継承と活用に関する考え方」の案を取りまとめたところでございます。</p> <p>この懇談会では、道民の貴重な財産である百年記念施設につきまして、単体の施設ごとの存廃に焦点を当てるのではなく、その施設が構成する上位の政策目的、すなわち、北海道が歩んできた歴史や文化、豊かな自然環境を大切な宝物として再確認し、次の世代に継承するという根っ子の政策目的に立ち戻って、道民の方々にどういったご負担をいただき、その目的を実現するのが、全体として最適かといった視点でも、議論をいただいております。</p> <p>そうしたご意見を踏まえまして、今回の案では、施設ごとの点として捉えるのではなく、自然豊かな周辺地域を含めた空間として捉え、隣接した他の文化・スポーツ施設等とも連携しながら、自然・歴史・文化を体感交流する空間として再生することを目指すこととしたところでございます。</p> <p>私も含め、ここに並ぶほとんどの職員は、百年記念塔を仰ぎ見る研修所で道職員人生のスタートを切り、北海道全体とその未来への奉仕を誓った地でもありますことから、文化や環境政策と同様、一時的、一面的なコスト論だけではなく、丁寧な議論が必要と認識しております。</p> <p>今後は、この考え方を基に、道議会でのご議論のほか、札幌市や江別市といった関係自治体それから、専門家からご意見をいただくとともに、幅広く道民のご意見を伺いながら、このエリアの再生に向けた構想を取りまとめまいります。</p>